認知のありか

信原幸弘

われわれ人間は、外界のあり方を認識しつつ、それにもとづいて自分の欲求を充足しうるような行為を行なう。大まかにいえば、これが与えられた環境のなかで生きる人間の基本的なあり方である。またそれは、程度の差こそあれ、生物一般に共通するあり方でもある。このようなあり方において、認識や、それにもとづく意思決定などがどこで行なわれるかといえば、それはもちろん主体の内部においてである、というのが当然の考え方であろう。「認知」という言葉を認知科学で用いられるような非常に広い意味で、つまり、認識や記憶、欲求形成、意思決定などもろもろの心的な過程を含む広い意味で用いることにすれば、認知は主体の内部で行なわれるというのが常識的な見方である。認知とはそもそも外界からの刺激入力を行動出力へと変換する主体内部の処理過程のことであるから、その定義からして主体の内部で行なわれる活動にほかならないと思われるのである。

だが、はたしてそうであろうか。認知はそのすべてが主体の内部で行なわれ、環境が寄与する側面はまったくないのだろうか。そうではなく、認知は主体と環境を統合した全体のシステムのなかで行なわれるのではないか。環境は主体にたいしてただ刺激入力を与え、行動出力を受け取るというだけではなく、そのような交渉を通じて主体の認知活動の一端を担っているのではないか。本稿では、認知は主体の内部で行なわれるとの考えを批判し、むしろ主体と環境を統合した全体のシステムのなかで行なわれる旨を主張する。[1] この主張は主体や入出力の概念にも大きな変更をもたらすことになる。認知が主体の内部で完結せず環境にも担われるということになると、主体と環境の間に明確な境界線を引くことはできなくなり、したがってまた入力と出力も主体と環境との接点としての意味を失うことになる。主体は主体＋環境の統合システムのなかの一項目にすぎなくなり、主体への入力や主体からの出力はシステム内部での情報のやりとりにすぎなくなる。こうして主体は本当の意味での主体ではなくなり、真の主体はむしろ統合システム全体ということになろう。

一　主体の自立性の考え

主体と環境のあいだに明確な一線を引き、もっぱら主体の内部で認知が行なわれるとする見方は、主体の自立性の考えと表裏一体の関係にある。われわれ主体は環境のあり方に頼ることなく、いわば自力で認識や行為を行なうと考えられている。それゆえ、われわれの行なう認識が誤ったり行為が失敗したりするとき、その責任はもっぱらわれわれに帰され、環境に責任の一端が帰されることはない。環境がどんなあり方をしていても、認識の誤りや行為の失敗はすべてわれわれの責任とされるのである。このことは、逆にいえば、認識や行為が成功したとき、その功績はもっぱらわれわれ主体の側にあるということである。環境が好都合なあり方をしていたために、認識や行為が首尾よくいったといえるような場合でも、本当は環境のおかげなのではなく、われわれがそのような環境のあり方をうまく利用したために首尾よくいったのであり、すべてはわれわれの取り計らいによるのである。

たとえば、いま眼前にトマトがあるとしよう。トマトと私の間をさえぎるものは何もなく、また照明も適度であり、したがってそのトマトは私からよく見えている。このような状況では、眼前にトマトがあることは容易に正しく認識できる。しかし、その認識の正しさはけっして環境のおかげなのではなく、もっぱら私の内部で行なわれた認識活動のおかげである。たしかに、認識の容易さは好都合な環境のおかげかもしれないが、認識の正しさはそうではない。その証拠に、照明が暗いとか、すりガラス越しとかの理由で、トマトがよく見えないときに、誤ってみかんがあると思ってしまっても、その誤りは環境のせいではなく、私のせいだということにされる。よく見えないのに性急な判断をくだしたのが悪いのであり、よく見えるように環境条件を整えてから判断をくだすべきだったのである。環境がどのようなあり方をしていても、私は自分の認識が正しくなるように取り計るべきであり、したがって認識が正しくても誤っていても、それはすべて私のせいであって、環境にいかなる責任もないのである。

行為についても同様である。マッチに火をつけるために、マッチをすったとしよう。マッチは湿っておらず、酸素も十分にあり、したがってマッチをすれば、火がつくような状況になっているとすれば、この行為は成功するであろう。しかし、その成功は環境のおかげではなく、やはりもっぱら私のおかげである。マッチが湿っていたり、あるいは酸素が不十分だったりして、マッチをすっても火がつかなった場合、失敗の責任が環境に帰されることはない。もちろん、マッチをすったのに火がつかなかったことの原因は環境のあり方に求められるだろうが、行為の失敗の責任はそうではない。それはあくまでも私すなわち主体の側にある。マッチをすることによってマッチに火をつけようとするのであれば、当然、マッチをすることが火がつくことを引き起こすような状況になっているかどうかを確かめておくべきであり、それを怠った私に失敗の責任はあるのである。私は、環境がどんなあり方をしていても、行為が成功するように取り計るべきであり、したがって行為の成功・不成功はすべて私の責任であって、環境に責任を帰す余地はないのである。

以上のような意味で主体は環境のあり方に依存することなく自立的に認知を行なうと考えられているが、はたして本当にそうなのであろうか。この点を検討するために、主体が自立的であるためにはどのような認知能力が必要となるかを考察してみたい。

ふたたびマッチをすって火をつけるケースを考えてみよう。私が環境のあり方に頼ることなく、マッチに火をつけたといいうるためには、その状況のもとでマッチをすれば必ず火がつくことを私は知っていなければならない。もし知らなければ、マッチをすっても火がつくかどうか私には分からないわけだから、たとえ望みどおり火がついたとしても、それはただ運がよかっただけである。つまり、環境がたまたまマッチをすれば火がつくようなあり方をしていてくれたからにすぎない。このように環境のあり方に頼って火をつけるのではなく、自立的に火をつけたといいうるためには、目下の状況でマッチをすれば必ず火がつくかどうかを確認し、そうであればマッチをすり、そうでなければ別の確実な手段を探す、というようなやり方をしなければならないのである。

しかし、ある状況のもとでマッチをすれば必ず火がつくことを知るためには、無数といってよいほど膨大な数の事実を知っていなければならない。マッチをすっても、その点火を妨げる要因は無数にありうるからである。たとえば、さきほど挙げた、マッチが湿っているとか、酸素が不足しているとかといった要因のほかにも、風が強すぎるとか、気温が極端に低すぎるとか、マッチ棒の先端の火薬部分に発火を防止する薬品が塗られているとか、等々いろいろな要因が、しかもわれわれが考えもしないような要因まで、ありうる。そのような無数の要因をわきまえて、それらが一つも介在していないことを知らなければ、ある状況のもとでマッチをすれば必ず火がつくことを知ることはできない。したがって、このような知識はいわば無限の知識を必要とし、それゆえ無限の認知能力を必要とするのである。

こうして自立的な行為は無限の認知能力を必要とする。同じことは認識についてもいえる。さきほどのトマトの例に戻れば、環境のあり方に頼ることなく、正しい認識を得るためには、やはり無数の事実を知っていなければならない。あるものがトマトであるかどうかに関係する証拠は無数にありうるからである。たとえば、こちらから見てトマトに見えるだけでなく、あらゆる角度からトマトに見えること、ホログラフでないこと、中が空っぽでないこと、トマトの手触りや味がすること、等々。これら無数の証拠を握っていなければ、眼前にトマトがあるという認識が正しいかどうかは分からない。たとえば、明るい照明のもとでトマトに見えたということから、トマトがあると私が判断した場合、この判断が正しいかどうかは私には分からない。たとえ正しいとしても、それはたまたま環境が好都合なあり方をしていてくれたからにすぎない。つまり、明るい照明のもとでトマトに見えれば、じっさいにトマトがあるというようなあり方をしていてくれたからにすぎない。そうでなければ、私の認識は誤っていただろう。この誤りを避けるには、無数の証拠を集めなければならない。そうしてはじめて、環境のあり方に頼ることなく自力で正しい認識を得たといえるのである。しかし、このような自立的な認識は無限の知識を必要とし、したがってやはり無限の

認知能力を必要とするのである。

こうして認知における主体の自立性は、主体が無限の認知能力をもっていてはじめて可能となる。だが、神ならばいざ知らず、われわれ人間がそのような無限の認知能力をもっていないことは明らかである。だから、われわれ人間は自立的な主体であるとか、認知はもっぱらわれわれの内部で行なわれるといった考えは、人間を無限の認知能力をもつ主体として理想化した話にすぎないのである。人間の認知能力の限界が考慮に入れられれば、認知における環境の寄与も正当に評価されるだろう。そこでつぎに人間の認知能力にどんな限界があるかを考察してみよう。

二　認知能力の有限性

われわれ人間は神のような全知全能の存在ではない。しかしそのことが直ちにわれわれの自立性を脅かすわけではない。というのも、われわれが必要とする知識は限られているからである。われわれはありとあらゆる知識を必要としているわけではなく、われわれの行為の成功を保証してくれるような知識を必要としているだけである。したがってそのような知識が自力で得られれば、われわれは認知においてなお自立的だといえよう。しかし、そうした知識についてすら、われわれはとうてい自立的だとはいえないのである。

マッチの例で見たように、ある状況のもとでマッチをすれば必ず火がつくことを知るのにも無数の知識が必要となる。われわれはそのような無数の知識を得ることはできず、したがってその状況のもとでマッチをすれば必ず火がつくことを確実に知ることはできない。われわれにできるのは、ある程度確からしい信念をもつことだけである。われわれはそのような信念にもとづいてマッチをすり、後の結果は状況にゆだねるしかない。状況がマッチをすれば火がつくようなあり方をしていれば、火がつくであろうし、そうでなければ、火はつかない。むろん、状況を改善して、マッチをすれば火がつく可能性を高めることはできる。たとえば、マッチが湿っているかもしれないという懸念があるなら、それを確認して、湿っていれば、乾かせばよい。だが、このようなことをいくらやっても、火がつくことを妨げる要因は無数にあるから、結局、マッチをすれば必ず火がつくように手配することはできない。つまり、どこまでいっても、マッチをすれば火がつくだろうという信念は信念にとどまって、知識には達しないのである。こうしてわれわれは行為の成功を結局は環境のあり方に一部ゆだねざるをえないのである。

だが、われわれが行為の成功を保証してくれる知識を確保できないのは、それに必要な無数の知識をわれわれが獲得できないためばかりではない。もうひとつ別の要因もある。それは、たとえそのような無数の知識を獲得できるとしても、そこから行為の成功を保証してくれる知識を導き出すことができないというわれわれの認知能力のもうひとつの限界である。[2]

ある状況のもとでマッチをすれば必ず火がつくことを知るのに必要な知識をすべて私が獲得できたとしよう。私は、マッチが湿っていないこと、酸素が不足していないこと、気温が低すぎないこと、等々、無数の知識をもっている。じっさい、私はその場の状況をほぼ完全に知っている。というのも、一見無関係と思われるようなこ

とがらでさえ、マッチをすれば火がつくか否かに関係しうるからである。[3] たとえば、壁の色が白いことでさえ、そのことがマッチをすれば天井からシャワーが出る仕掛けの一部になっていれば、マッチに火がつくかどうかに関係することになる。したがって、ある状況のもとでマッチをすれば必ず火がつくことを知るには、その状況のもとでじっさいにそれに関係することがらだけではなく、じっさいには関係しなくても、関係する可能性のあることがらはすべて知っておく必要があるのである。

このような無数の知識をもっていれば、原理的には、その状況のもとでマッチをすれば必ず火がつくことを導き出すことは可能である。両者の間には論理的な演繹関係があるといってよい。しかし、じっさいにそのような帰結を導き出すことはわれわれ人間にとって可能であろうか。そのような帰結を導き出すためには、われわれは目下の状況にかんする無数の知識を参照して、マッチに火がつくことを妨げる要因がないかどうかを調べ上げなければならない。マッチが湿っていないことや、酸素が不足していないことなどの二、三の知識を参照するだけでは、マッチをすれば必ず火がつくという確実な知識を導き出すことはもちろんできない。そのためには、目下の状況にかんする無数の知識を呼び出し、それらとマッチの点火との関係を逐一検討しなければならない。ところが、われわれの知識処理の速度は有限であり、したがってそのような無数の知識の参照・吟味には無限の時間を要することになる。それゆえ、じっさいにはマッチをすれば必ず火がつくという知識を導き出すことは不可能なのである。

こうしてたとえ無数の知識をもっていたとしても、そこから行為の成功を保証する知識を導き出すことは実際上不可能である。なんらかの知識をもっていても、それを参照し、処理するのに時間がかかるから、結局、無数の知識をもっていても、それは宝のもちぐされなのである。行為の遂行にさいしてわれわれはそれらをすべて活用するわけにはゆかず、活用できるのは有限個の知識だけである。

しかも、われわれが時間的に制限のある環境のうちに生きていることを考えれば、活用できる知識はごく限られたものにならざるをえない。マッチに火をつけるにも、いつまでもマッチをすれば火がつくかどうか考えていてよいわけではない。マッチに火をつけて、凍えそうな手を暖めようというのであれば、一刻も早くマッチをすったほうがよい。あれこれ考えている余裕はない。

マッチをする場合とちがって、失敗したときに多大の犠牲を伴う場合でも、成功の保証を求めていつまでも熟慮に沈んでいるわけにはゆかない。いつかは、絶対的な保証のないまま、じっさいの行為へと踏み出さなければならない。たとえば、金庫に人が閉じこめられたとしよう。金庫の鍵を爆破する以外に助け出す方法はない。しかし、爆破すれば、中の人の命も危ないかもしれない。とはいえ、爆破してもその人が大丈夫かどうかをいつまでも検討しているわけにはいかない。そんなことをしていれば、中の人は窒息して死んでしまうだろう。それゆえ、爆破しても大丈夫だという確証がある程度得られれば、それだけで爆破に踏み切るしかないのである。

こうしてわれわれは無数の知識を有限の時間内に処理することができないだけではなく、処理のために許された時間もかなり制限さ

れているので、結局、ごく一部の知識を活用して、なすべき行為を決定するしかない。そのような決定はけっして目標の実現を保証してくれるわけではない。首尾よく目標が実現できたとすれば、それはやはり環境が幸いにも好都合なあり方をしていてくれたからである。われわれは自分の選んだ行為が必ず目標を実現してくれることを知っているわけではない。そのような確実な知識に達するまえに、われわれは行為に踏み出すしかないのである。したがって、結局は、行為の成功を部分的に環境にゆだねるしかないのである。

われわれは無数の知識を獲得することができず、また有限の時間内に無限の知識を活用することもできない。このようなわれわれの認知能力の限界のために、われわれは行為の成功を保証してくれる知識を得ることができず、それゆえわれわれは行為の成功・不成功を一部環境のあり方にゆだねざるをえないのである。

むろん、われわれはふだん、行為の成功を保証する知識をもっているように思っている。通常の状況のもとでは、われわれはマッチをすれば必ず火がつくことを知っているつもりでいる。その証拠に、われわれはとくに何も調べずに、ただマッチをする。そして当然、火がつくものと思いこんでいる。けっして一か八か、環境まかせにやっているのではない。マッチをすれば火がつくと思って、マッチをすっているのである。この思いは自分にとっては不確実な信念などではなく、確実な知識なのである。

このことはたしかに日常的な知識のあり方を示しているといってよい。われわれは、とくに異常が認められないかぎり、通常の事態が成り立っていることを暗黙の前提としている。そのような前提のもとでは、マッチをすれば火がつくことは、とくに何も調べなくても、あるいはたかだかマッチが湿っていないことくらいを調べれば、われわれの知識でありうる。日常的な知識は、通常の事態が成り立っているという前提のもとで、たかだかごく少数の事実を確認すれば獲得できるような知識なのである。しかし、このような知識はもちろん絶対確実な知識ではない。なぜなら、暗黙の前提とされた通常の事態が本当に成立しているかどうかは分からないからである。したがって、真理性を含意するという知識の本来の意味からいえば、日常的な知識は知識の名に値せず、信念にとどまるといわざるをえない。

こうしてわれわれの主観的な意識からいえば、確実な知識にもとづくと思われる行為も、じつは不確実な信念にもとづくものでしかなく、その成功はやはり環境のあり方に頼らざるをえない。われわれは環境が通常のあり方をしていることを暗黙の前提としているが、そのことがまさに環境にたいする暗黙の依存にほかならないのである。

三　道具や協同による認知の拡大

われわれは有限の認知能力しかもたないために、行為の成功を保証する知識を導き出すことができず、行為の成功を一部環境のあり方にゆだねざるをえない。したがって、われわれは自立的に認知を行なっているわけではなく、認知はわれわれの内部で完結しているわけではない。認知はわれわれの内部を超えて環境にまで広がっているのである。

ところで、認知が個々人の内部を超え出ることは、道具の使用による認知や複数の人間の協同による認知[4]においてとりわけ顕著に見られるように思われよう。しかし、これらのケースは本稿で主張したい認知の環境依存性とは異なる。それらは認知の自立性の考えと必ずしも背反しない。つぎにこの点を考察してみたい。

たとえば、電卓を使ってある計算をするとしよう。われわれは必要なキー操作を行ない、表示された答を読みとる。この計算過程においてわれわれが自分の内部で行なう認知活動はごくわずかである。必要な認知活動は大部分電卓が行なってくれている。電卓はわれわれが暗算で計算するときに行なわなければならない認知活動をいわば代行してくれているのである。しかも、電卓はたんに暗算の代行をするだけではなく、われわれが暗算ではできないような計算をもやってくれる。したがって、電卓はわれわれの計算能力を真の意味で拡大しているといえる。

これは電卓に限らず道具一般にいえることである。一般に道具は、それなしでは不可能な認知活動を可能にしてくれる。われわれは道具を使うことにより、認知活動の一部を道具にゆだねるだけでなく、一般に自分の内部では遂行不可能な一部を道具にゆだねるのである。

道具を使った認知では、明らかに認知の一部は道具にゆだねられている。したがってこのような認知は、認知がわれわれの内部では完結せず環境にも担われることを明白に例示しているように思われよう。しかし、道具の担う認知は環境の担う認知とは異なる。なぜなら、われわれ主体を拡大して道具をわれわれ主体の一部と見なしつつ、なおその拡大主体をそれ以外の環境から区別しておくことが可能だからである。このような拡大主体を想定すれば、道具を使った認知は道具に認知の一部をゆだねているからといって環境に認知の一端をゆだねているとはいえなくなる。道具にゆだねた認知もまた拡大主体の内部で行なわれる認知だからである。したがって、道具を使った認知はなお自立的な認知でありうるのである。

認知の環境依存性のテーゼは、このような道具を取り込んだ拡大主体でさえ自立的な認知を行ないえず、環境のあり方に頼らなければならないことを主張する。どれほど優れた道具を取り込もうとも、それはわれわれの有限の認知能力を無限にまで拡大しはしない。認知能力が有限にとどまるかぎり、われわれは認知の一端を環境のあり方にゆだねざるをえないのである。

複数の人間の協同による認知についても同様のことがいえる。大工と助手が協同で家を建てる場面を考えてみよう。大工は助手に必要な資材の名を告げ、助手はそれを資材置き場からもってくる。大工が「板」といえば、それを聞いた助手は板をもってくる。大工は助手のもってきた資材を用いて家を組み立てる。こうして大工と助手の協同で家が建っていくわけである。この過程で、大工は大工の、助手は助手の役目を果たし、いずれの役目も家を建てるのに不可欠である。したがって、たとえば大工の視点からこの家を建てるという行為を見れば、その行為を成功させるのに必要な認知活動の一部を助手にゆだねていることになる。そして助手は大工にとっては自分の外にある環境の一部であるから、助手にゆだねることは環境にゆだねることにほかならない。同じことは助手についてもいえる。

助手もまた家を建てるのに必要な認知活動の一部を大工に、したがって助手にとっての環境に、ゆだねているのである。

しかし、このような場合も、大工と助手を別々の主体と考えずに、二人を複合した主体を考えれば、この複合主体の内部で認知が行なわれていると考えることができる。大工が行なう認知も、また助手が行なう認知も、ともに複合主体の内部で行なわれる認知であるから、両者がそれぞれ自分以外のものにゆだねた認知は複合主体にとっては自分の内部での認知にすぎない。したがって、複合主体を想定すれば、この協同による認知において各人が自分以外の人にゆだねた認知はけっして環境のあり方にゆだねた認知ではない。自分以外の人の認知もまた複合主体の認知だからである。こうして複数の人の協同による認知はなお自立的な認知でありうるのである。

複数の人の協同による認知において複合主体を想定することは珍しいことではない。野球のチームや会社組織など、われわれの社会にはそのような複合主体が満ち溢れている。これらの複合主体は、たんに複数の人間の協同作業だけではなく、多くの場合、さきに述べた道具の使用を含むであろう。つまり、複合主体であると同時に、道具を取り込んだ拡大主体でもあるのである。このような複合的拡大主体は個々人に比べれば、はるかに優れた認知能力を有するであろう。しかし、その能力が有限であるかぎり、複合的拡大主体もまた認知の一端を環境にゆだねざるをえないのである。

道具の使用による認知や複数の人の協同による認知は、道具や他人に認知の一部をゆだねているが、そうであるからといって環境に頼った認知であるわけではない。道具を取り込んだ拡大主体や協同する人々をまとめた複合主体を想定すれば、道具や他人にゆだねた認知もそれらの主体の内部で行なわれる認知であって、環境にゆだねた認知ではなくなるからである。認知の環境依存性のテーゼが主張しようとしているのは、このような道具の使用による認知や複数の人々の協同による認知に特徴的な認知のあり方ではなく、拡大主体や複合主体ですら認知の一部を環境のあり方にゆだねざるをえないといえるような意味での認知の環境依存性である。

四　主体と環境の適合

われわれは行為の成功を保証するような知識を獲得することができず、したがって認知の一部を環境のあり方にゆだねざるをえない。しかし、環境はどのようにして認知の一端を行なうのだろうか。道具や他人がどんなふうに認知を行なうかは比較的明らかである。それはわれわれ主体が行なう認知と大きく異なるわけではない。だが、環境が行なう認知とはどのようなものであろうか。

すでに述べたように、われわれは環境が通常のあり方をしているときに、正しい認識や成功した行為を得ることができる。そのさい、われわれは環境が通常のあり方をしていることを暗黙の前提にしており、本当にそうかどうかを確かめたりはしない。確かめようにも、無限の認知能力が必要だから、確かめようがないのである。それゆえ、正しい認識や成功した行為が得られるのは、われわれの内部での認知活動のおかげだけではなく、環境がじっさいに通常のあり方をしていてくれたことのおかげでもある。たとえば、トマトを認識するとき、われわれはふつう、トマトに見えれば、直ちにトマトと

判断する。そしてこの判断は通常正しいが、それは環境が通常、トマトに見えるものはじっさいにトマトであるようなあり方をしているからである。いいかえれば、環境は通常、トマトの見えを生じさせる光刺激がトマトのみからわれわれの眼に送られてくるようなあり方をしているのである。このような環境の通常のあり方が正しい認識の形成に一役買っている。それは、網膜や視神経、視覚中枢などにおける認知活動が正しい認識の形成に一役買っているのと同等である。

この点をもう少し詳しく考察してみよう。われわれがトマトを認識するとき、通常の環境のもとでは、トマトからある一定の光刺激がわれわれの眼に到来し、その刺激が網膜や視神経を伝わって視覚中枢に伝えられ、そこで視覚処理がなされてトマトの見えが形成され、そしてトマトの判断がくだされる。この一連の過程全体がトマトの認識過程であって、それを環境に属する部分（トマトから眼に一定の光刺激が伝えられる部分）とわれわれの内部で行なわれる部分とに分けて、前者を非認知的な過程とし、後者のみを認知的な過程とする理由はないように思われる。そのような差別的な扱いをしたくなるのは、認知はわれわれの内部で行なわれるという先入観のせいである。この先入観を取り払えば、環境における光刺激の伝達も認知過程の一環にほかならないと考えるのが自然であろう。じっさい、環境が通常のあり方をしていなければ、たとえばトマトの模造品からトマトと同じ光刺激が眼に伝えられれば、われわれは誤った認識を得ることになるだろうが、その誤りはわれわれの内部での認知過程が正常に機能しなかったために起こる誤り、たとえばトマトを食べたいという欲求が強すぎてりんごがトマトに見えてしまったために起こる認識の誤りと同等である。このことからも通常の環境において生起する過程を認知活動の一環と見なすのは当を得ているといえよう。

行為についても同様である。たとえば、ある部屋の電灯をつけたいしよう。部屋の中を見渡すと、右側の壁にスイッチがあることに気づく。そのスイッチを押せば電灯がつくだろうと考えて、とくに確かめもせず、スイッチを押す。そうすれば、通常、電灯はつく。つまり、その行為は成功する。しかし、そうであるのは、環境がじっさいに、スイッチを押せば電灯がつくようなあり方をしていたからである。つまり、スイッチと電灯の間が電線で結ばれ、スイッチや電灯に故障がなく、一定の電圧がかかり、等々のあり方をしていたからである。こうした環境の通常のあり方が行為の成功に一役買っているのは、スイッチの発見や、スイッチを押せば電灯がつくといった信念の形成が一役買っているのと同等である。部屋の電灯をつけたいという欲求を抱いてから、スイッチを見いだし、それを押せば電灯がつくと思い、スイッチを押し、電流が流れ、そして最後に電灯がつくにに至るまでの一連の過程は、その全体が認知過程であって、欲求からスイッチを押す動作までの内部の過程とスイッチが押されてから電灯の点灯に至る外部の過程を区分して、前者のみを認知的な過程と見なす理由はないように思われる。環境が通常のあり方をしていなければ、スイッチが押されても電灯はつかないだろうが、この失敗はわれわれの内部での認知過程が正常に機能しなかったために起こる失敗と同等である。環境の通常のあり方は、われわ

れの内部での認知過程を引き継いでそれを完成させる認知的な過程と見るのが妥当と思われるのである。

環境からさまざまな刺激がわれわれに伝えられ、われわれはそれを処理して外界のあり方を認識し、その認識にもとづいて自分の欲求を満たすことができるような行為を選択し、その行為によって意図した事態が実現される。この一連の過程全体が認知過程であって、それを環境に属する部分とわれわれの内部に属する部分に分け、後者のみを認知過程とするべき理由はない。この一連の過程のどこかに異常が起これば、行為は失敗に終わるだろう。その異常がわれわれの内部で起ころうと、外部の環境で起ころうと、行為の失敗という点では同じことである。したがって、環境における異常もまた認知過程の異常と見なすのが適当と思われるのである。

環境が通常のあり方から大きく逸脱するとき、つまり非常に奇妙な環境であるとき、たんに行為が失敗に終わると語るだけではすまなくなる。たとえば、幻想の世界のように、事物が何の原因もなくふっと現れたり消えたり、ある事物が見る見るうちに別の事物に変化したりするような環境のもとでは、トマトだと思ってもそれはトマトではないだろうし、マッチをすっても火はつかないだろう。たまたま正しい認識や成功した行為が得られたとしても、それはまったくの偶然である。このような環境のもとでは、われわれが現状と同じ認知活動を行なうかぎり、得られる認識はほとんどが誤りとなり、また遂行される行為もほとんどが失敗となる。だが、このようなまったく信頼性のない認知活動はそもそも認知活動といえるだろうか。ほとんどが誤りであるような認識やほとんどが失敗であるような行為は認識や行為の名に値するだろうか。誤った認識や失敗した行為もまたふつうはなお認識であり行為であるが、それは誤りや失敗がときたまのことだからである。いつも間違った計算をする人が計算をしているとはいえないように、いつも誤った認識や失敗した行為を行なっている人は認識や行為を行なっているとはいえず、したがってそもそも認知活動をしているとはいえないのである。[5]

われわれは環境がどれほど異常になっても、われわれの内部の認知活動が同じであるかぎり、依然として認知活動を行なっていると考えたくなるが、そうではない。環境が大規模に異常になる代わりに、われわれの内部の認知活動が大きく狂ってしまう場合を考えてみよう。この場合、環境は通常のままだが、われわれが生み出すのはほとんど誤った認識や失敗した行為ばかりである。したがって、明らかに、われわれはもはや認識や行為を行なっているとはいえず、それゆえそもそも認知活動を行なっているとはいえない。われわれの内部の認知活動が大きく狂ってしまった場合は、それがもはや認知活動とはいえないことは比較的理解しやすいが、環境が極端に異常になって正しい認識や成功した行為がほとんど得られなくなる場合も、事情は同じなのである。

われわれの内部の認知活動が大きく狂っても、それと呼応するような仕方で環境が大きく変化し、結局、正しい認識や成功した行為がおおむね得られるようになれば、認知活動が行なわれているといってよいであろう。同じように、環境が大きく異常になっても、それと呼応するような仕方でわれわれの内部の認知活動が変化すれば、やはり認知活動が行なわれているといってよいであろう。結局、

認知活動が行なわれているかどうかは、われわれの内部のあり方と環境のあり方との適合の問題であり、両者が適合して正しい認識や成功した行為がおおむね得られるなら、したがってわれわれがその環境のなかで生きていけるなら、認知活動が行なわれているといえるわけである。どちらか一方、とくにわれわれの内部のあり方だけで、それが認知活動かどうかがいえるわけではないのである。[5]

そうすると、結局、認知活動はわれわれと環境とを統合した全体システムの中で行なわれると考えるのがもっとも適当であるように思われる。認知活動にかんしてわれわれの内と外の間に境界線を引きことはできず、環境とわれわれの区別は意味をなさない。環境の中で起こる諸過程とわれわれの内部で起こる諸過程とは連続しており、どこからどこまでが認知的な過程で、どこからどこまでがそうでないかを有意味に区別することはできない。われわれは環境の中の一要素にすぎず、われわれの内部の認知活動は環境全体の認知活動の一環にすぎない。その意味で、認知の真の主体はわれわれを含む環境全体であるといえよう。

註

（1）本稿の考察は、認知科学における環境主義ないし状況主義と総称される見方から多くの示唆を得ている。この見方については、J.J.Gibson, *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton Millfin Company, 1979（邦訳『生態学的視覚論』古崎敬ほか訳、サイエンス社）; L.A.Suchman, *Plans and Situated Actions: The Problem of Human-Machine Communication*, Cambridge University Press, 1987; J.Lave & E.Wenger, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, 1991（邦訳『正統的周辺参加――状況に埋め込まれた学習――』佐伯胖訳、産業図書）; J.Barwise & J.Perry, *Situations and Attitudes*, The MIT Press,1983（邦訳『状況と態度』土屋俊ほか訳、産業図書）; 橋田浩一＆松原仁「知能の設計原理に関する試論――部分性・制約・フレーム問題」『認知科学の発展』第七巻、一九九四年; 山田友幸「環境における制約とロボットの仕様」『現代思想』一九九〇年三月号; T.Winograd & F.Flores, *Understanding Computers and Cognition*, Ablex, 1986（邦訳『コンピュータと認知を理解する』平賀譲訳、産業図書）などを参照。

（2）認知能力の限界にかんするこの区別は、橋田浩一＆松原仁、前掲論文、において、「情報の部分性」にかんする「記述の部分性」と「処理の部分性」の区別として、両者の相互関係も含めて、詳細に論じられている。

（3）フォーダーは、ある命題を確証するのに、任意の知識が関与しうることを「確証の等方性」と名付けている。J・A・フォーダー『精神のモジュール形式』伊藤笏康、信原幸弘訳、産業図書、一七〇頁、参照。

（4）近年、認知科学では、道具の使用や複数の人間の協同による日常的な知的作業の分析が盛んである。たとえば、『認知科学の発展』第七巻、一九九四年、所収のL・サッチマン（土屋孝文訳）「日常活動の構造化」およびE・ハッチンズ（高橋和弘訳）

「社会分散認知システムにおいて知はどこに存在しているか」を参照。

（5）デイヴィッドソンの善意解釈の原理にもとづく解釈理論によれば、多くの正しい信念の帰属が可能な場合にのみ、誤った信念の帰属も可能となり、全面的に誤った信念体系はそもそも信念の体系ではない。Cf.D. Davidson, *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford University Press, 1984（邦訳『真理と解釈』野本和幸ほか訳、勁草書房）所収の論文"Radical Interpretations"（「根元的解釈」金子洋之訳）；"On the Very Idea of Conceptual Scheme"（「概念枠という考えそのものについて」植木哲也訳）参照。

（6）橋田浩一＆松原仁、前掲論文、一九三頁では、主体との間にある種のフィードバック・ループが成立している適合的な状況を環境、そうでないものを外界とよんで区別し、状況の変化によって、環境が外界へと崩壊したり、逆に外界が環境に転化したりしうることを指摘している。

（のぶはら・ゆきひろ　筑波大学哲学・思想学系助教授）